

## 「第9回 日本女性学習財団 未来大賞」全体講評

「日本女性学習財団 未来大賞」は、今年度で9回目を迎えました。前身のレポート募集事業から数えると、32回目の募集となります。

今回の応募者は個人31件とグループ3件でした。個人は10代から80代まで幅広い年齢層の方に応募していただき、今年は10代、20代の応募が14件と、若い世代のレポートが目を引きました。応募者の居住地は全国に広がっています。

これらの中から厳正な審査の結果、大賞には、菊池愛子さんの「30代シングルマザー、包括的性教育を学ぶ—暴力のその後、援助未満の場所から再出発を考える—」が選ばされました。審査員からは「包括的性教育を学んだことを機に生き方を転換した点が新鮮だ」「『手放す』ことが再出発という視点は、同様に困難な状況におかれている女性のエンパワーメントになる」といった高い評価が寄せられました。同時に「経済的には壁があるが、どう乗り越えていくのか」「社会に対する具体的な提言も聞きたい」といった今後に寄せる期待も語られました。

最終選考には、大賞受賞作のほかに2点が残りました。

ひとつは、新聞社を退職した女性記者たちが立ち上げたグループのレポート「女性やマイノリティの声を等身大で発信し記録する～メディア『生活ニュースコモンズ』の挑戦～」です。男性中心の大手メディアでは「政治、経済、社会」こそ主要ニュースとされ、ジェンダー視点の記事は押しつぶされてしまいがちです。これに異を唱える女性記者らが無料で読めるニュースサイト「生活ニュースコモンズ」を立ち上げ、これまでかき消されてきた女性やマイノリティの声を伝える報道を始めました。「メディアの世界に一石を投じるもの、メディアとジェンダーの視点をもったこれまでにないレポート」と高く評価される一方で、「報道の内情を知らない人には少しづかちにくい」という声も上がりました。

もうひとつの作品は「自分の中の偏見との葛藤～ジェンダー変革期の半生を振り返って～」。ジェンダー視点でつづられた自分史です。男の子と間違えられた幼少期、「手に職を」と考えて看護師となった青年期を経て、結婚して夫に伴い地方に転居。4人の子どもを育てながら地域活動に目覚め、自治会長にも就任します。「地道な歩みから得た気づきから出発を実践し、地域に活動を広げている」と評価されました。

このほか、認知症になった祖母のひと言をきっかけに立ち上げたデイケアサービス奮闘記、戦後広島でファッショントリビュートとして生きた母の活躍と復興の物語、大学授業にジェンダーバイアスの気づきをもたらすコントの提案など、多彩なレポートが寄せられました。

10代、20代のレポートにも力作が散見されました。音楽教育にジェンダーの視点をと訴える高校生、女性初の女子プロサッカーリーグ「WEリーグ」のジェンダー平等実現への取り組みを描いた大学生などです。なかにはジェンダー視点をしっかりとっているものの、残念ながら未来大賞のテーマである「出発・再出発」の視点が盛り込まれていないレポートもありました。今後のブラッシュアップが期待されます。

今回も、たくさんのご応募ありがとうございました。本誌に掲載した未来大賞の作品を手に、みなさんそれが学びを深め、そして語り学び合う場が広がることを願っています。